

仙台市文化財調査報告書第147集

仙台平野の遺跡群 X

——平成 2 年度発掘調査報告書——

1991年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第147集

仙台平野の遺跡群 X

——平成 2 年度発掘調査報告書——

1 9 9 1 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」調査に着手したのは、昭和56年でした。この事業も数えて10年目を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は山田条里遺構と郡山遺跡の遺構確認調査を実施、本報告書はそれをまとめたものであります。

本市は平成元年4月に政令指定都市となり、今後は「仙台市総合計画2000」に基づいた都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められてきています。またそれに伴い民間の小規模開発も増え、「仙台平野の遺跡群」の調査に期待するところが大きいと言わざるを得ません。

開発の増加に伴い発掘調査量の増える中、われわれは先人の創造した歴史と文化遺産を次代に継承し、生活の中での活用を図っていかなければならぬと考えます。しかし、こうした文化財の保護活用は市民の方々や有識者の御支援があってこそ、成果をあげられるものと思います。

仙台市も平成元年4月に政令指定都市となり、早や2年が過ぎようとしております。これからは、もっと広い視野に立って、「仙台平野の遺跡群」調査を行っていく必要があります。日々の変化が激しい昨今ですが、精一杯努力してまいる所存でありますので、今後とも、御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶いたします。

平成3年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

例　　言

1. 本書は平成2年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・佐原:1973)を使用した。
3. 本書中で使用した地形図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」・5万分の1「仙台」の一部である。
4. 実測図中の水系高は標高で示してある。
5. 実測図中の方位は磁北に統一してある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
6. 本書の作成・編集は、渡部弘美、斎野裕彦、高倉祐一が行ない、執筆者は文末に記した。
7. 遺構略号を次の通りとした。

S A 材木列 S B 建物跡 S D 溝跡
S I 住居跡 S K 土坑 S X 性格不明遺構

8. 本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会で保管している。
9. 今年度の事業は平成2年4月に着手し、平成3年3月に終了した。

本文目次

序文

例言

I. 調査計画と実績	1
II. 発掘調査報告	3
(1) 山田条里遺構略報	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 遺跡の立地と環境	3
3. 調査の方法と経過	4
4. 発見遺構と出土遺物	7
5.まとめ	9
(2) 郡山遺跡	19
1. 遺跡の位置と環境	19
2. 調査概要	19

挿図・写真目次

第1図 遺跡位置図	1	第6図 SD 9・13溝跡	11
第2図 周辺の遺跡	4	第7図 SK 6・9・15・25土坑	
第3図 山田条里遺構全体図	5・6	B区水田跡(畦畔1～3)	12
第4図 B区183～185地点断面	7	第8図 郡山遺跡調査区位置図	20
第5図 SB 1・2・3・4建物跡	10		
写真1 遺跡周辺航空写真(1987年)	13	写真8 SK 8 土坑全景(北より)	15
写真2 遺跡周辺航空写真(1956年)	13	写真9 SK20 土坑全景(北東より)	15
写真3 「名取郡北方山田邑」絵画(文政5年 ・1822年)仙台市博物館所蔵	13	写真10 3層検出水田跡(北西より) B区・1～5号畦畔	16
写真4 掘立柱建物跡全景(北より)		写真11 3層検出水田跡、牛足跡(南より) B区150地点	16
4トレンチ	14	写真12 2号石垣全景(東より)C区77地点	16
写真5 SD 9溝跡全景(南より)	14	写真13 F区出土焼夷弾	17
写真6 SD 9溝跡断面(北より)	14	写真14 SD 9溝跡出土遺物1	17
写真7 SD13溝跡全景(西より)		写真15 SD 9溝跡出土遺物2	18
17トレンチ	15		

I. 調査計画と実績

現在の仙台市における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の数は、昭和62年11月1日の宮城町との合併、及び昭和63年3月1日の泉市・秋保町との合併により、これまでの旧仙台市域の425箇所に新たに255箇所を加え、680箇所に達している。これらの遺跡は、その一つ一つが先人の残した貴重な文化遺産であり、先人の歴史と当時の具体的な生活の様子とを現代に伝えるものである。われわれは、これらの文化遺産をわれわれの世代で消滅させることなく、次の世代へと継承していくべき責務を担っている。また、このような文化財保護の努力を続ける一方で、これらの文化遺産を学術研究の場にとどまらず、広く学校教育や社会教育の場、そして市民生活の中においても活用していく必要がある。しかし、ここ数年来の都市化に伴う公共事業や民間による開発行為の増加は、特に平野部において著しく、これらの遺跡の中にはそれによって破壊の危機にさらされているものも数多い。

当教育委員会では、これらの遺跡の範囲の確認と性格の究明のため、昭和56年度より国の補助を受け「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。10年目をむかえた今年度は、山田条里遺構、郡山遺跡の発掘調査を実施した。



第1図 遺跡位置図 (Scale 1:100,000)

今年度の発掘調査計画と実績は以下の通りである。

1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群の範囲確認、性格究明のための発掘調査

2. 調査面積 4055.2m²

3. 調査期間 平成2年4月～12月

4. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

課長 早坂 春一

調査第一係

係長 佐藤 隆 主任 木村浩二 主事 斎野裕彦 教諭 五十嵐康洋

調査第二係

係長 加藤正範 主事 渡部弘美 教諭 高倉祐一

管理係

係長 鶴田義幸

調査実績表

遺跡名	所在地	申請者	調査事由	対象面積	調査面積	調査期間
山田条里遺構	太白区 山田・鶴取	山田利政土地改良 理事長 相原 博	農村基盤総合 整備事業	約19.3ha	約3700 m ²	平成2年4月25日 ～12月14日
郡山遺跡 第87次調査	太白区郡山 三丁目117-7・18	太白区郡山 三丁目13-16 赤井沢 賢治	住宅建築	約874m ²	274.7m ²	平成2年7月10日 ～10月19日
郡山遺跡 第88次調査	太白区郡山 三丁目120	若林区石名坂7 番地事業代表取締役 加藤 文三	共同住宅建築	502.2m ²	80.5m ²	平成2年7月10日 ～8月3日

II. 発掘調査報告

[1] 山田条里遺構略報

1. 調査に至る経緯

山田条里遺構が位置する山田・鈎取地区周辺は近年来急速に開発が進み、宅地化等によって周辺環境が変貌しつつある。この中にあって当遺跡は、水田地帯として古来からの景観を残している数少ない地域であった。特に一辺約110mを計る整然と区画された土地割が東西400m・南北500m程の範囲にみられ、条里制に起因する土地割と考えられてきた。

当地区では上述した都市化への変容と共に都市近郊農業の確立のため、当遺跡のほぼ全域を包括する農村基盤総合整備事業の計画が進められてきていた。景観面からみても完全なる破壊が生じるため、仙台市教育委員会では関係機関との協議を行い、地区全体の詳細な地形図の作成・水路部分を中心とした調査・条里遺構の積極的確認を得るための事前の記録保存となる発掘調査を実施することとし、工事に関しては地下遺構の破壊を最小限に止める工法の指導を行った。調査は事業との関連から3ヶ年にわたり、平成元年度が初年度となる。元年度の調査は当遺跡東側部約3000m²の調査を実施し、平安時代の水田跡・水路跡・溝跡・土坑等が確認され、各種の遺物が出土している。二年次目の今回の調査は当遺跡中央部を中心とする約19.3haを対象地域とし、4月25日より調査を開始した。

2. 遺跡の立地と環境

1) 地理的環境

山田条里遺構は仙台市の南西部、太白区山田・鈎取地内に所在し、北側は青葉山丘陵が西から東へ向かって延び、南側には名取川を挟んで高館丘陵が位置している。本遺跡はこの青葉山丘陵と高館丘陵の間にひろがる標高24~40mの「名取台地（山田面）」と称される河岸段丘の東端部に位置する。更に遺跡部分は名取川に流れ込む支流の影響を受けた平坦な扇状地（30~38m）にあり、基盤となる段丘疊層上には粘土混じりの砂・シルトが厚く堆積している。遺跡の範囲は約66万m²にも及び、現在は水田地帯となっている。

2) 歴史的環境

仙台市南西部の名取川北岸地域は、本遺跡をはじめ各時代の遺跡が分布している所である。以下各時代ごとに周辺の遺跡を概観していきたい。

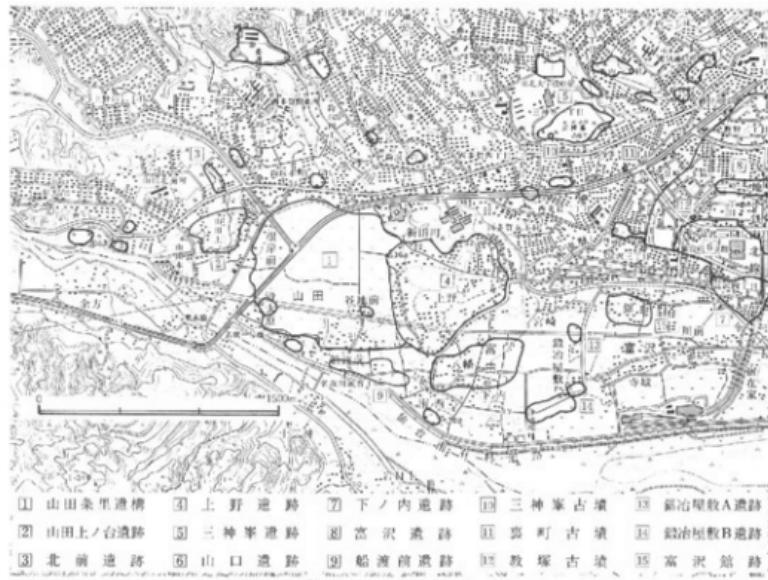
旧石器時代の遺跡は、青葉山丘陵から南に張り出した西方の小支丘端部に山田上ノ台遺跡、北前遺跡がある。縄文時代になると、西から人来田遺跡、山田上ノ台遺跡、北前遺跡、上野遺跡などがあり、北東の青葉山丘陵小支丘には三神峯遺跡がある。また東の富沢地区の自然堤防

上には山口遺跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡が存在する。弥生時代のものとしては東方の富沢遺跡で水田跡が発見されているほか、南側に船渡前遺跡がある。古墳時代の遺跡としては丘陵頂・裾部に三神峯、裏町古墳などが北東部に展開し、荒川を挟む富沢・大野田地区の自然堤防上には教塚古墳、春日社古墳、王ノ壇古墳などが知られている。奈良・平安時代のものは、前述の富沢・大野田地区の自然堤防上に立地する山口遺跡や六反田遺跡などで集落が確認されているほか、富沢遺跡では水田跡が発見されている。また東側には鍛冶屋敷A・B遺跡、八幡西遺跡などがある。中世では東方に戦国時代の富沢館跡がある。

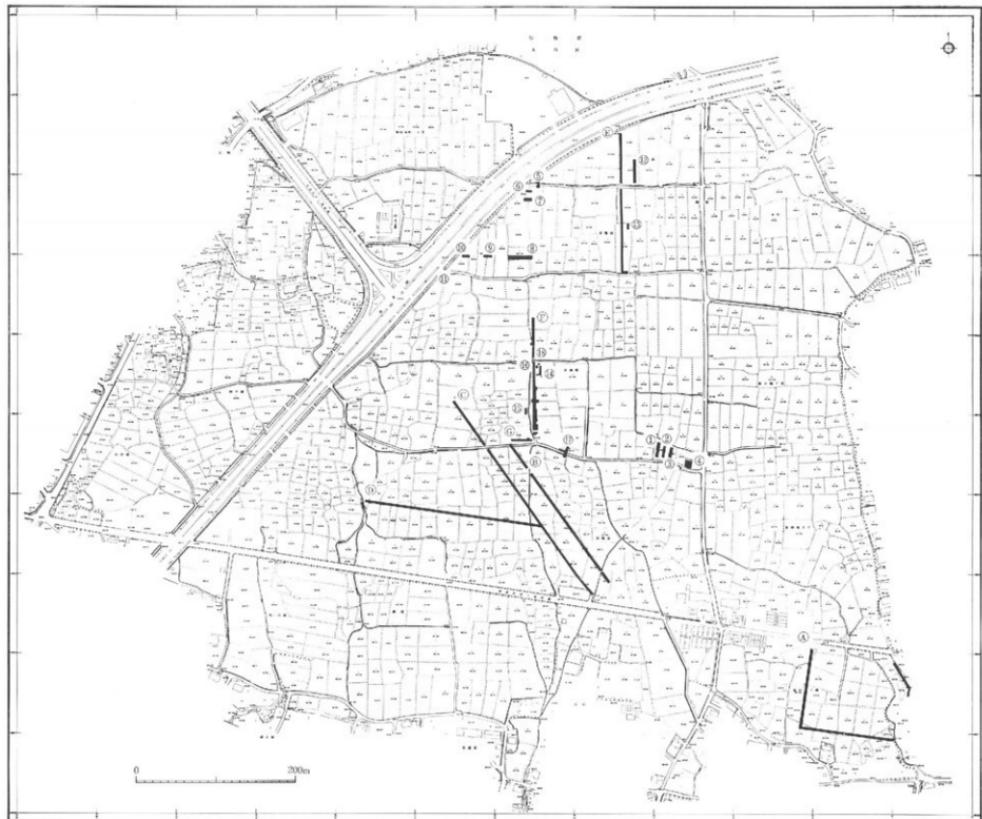
3. 調査の方法と経過

調査区は掘削が深くおよぶ水路部分を中心としているが、遺構の広がり及び当遺跡の性格把握のために小トレンチを隨所に設け調査を進めている。水路部分のトレンチ(第3図のA～G)は性格上長大なものになるが幅は2.5mとしている。小トレンチ(第3図の1～18)は状況に応じ任意の大きさをしている。調査区の基準線はA・B・C・D区では任意の基準線とし、10m毎にグリッドを設定したが、他は平面直角座標を基にした基準杭で同様に対処している。

調査は4月25日より開始し、A区・1～4トレンチ・E区から以降の調査区へと進めていった。現況は1～4トレンチが畠地で、他はすべて水田である。調査区が広範囲にわたり基本層位は色調等若干の違いが見られるが、層序等大まかな統一的把握は可能である。



第2図 周辺の遺跡



第3図 山田条里造構全体図

A区は東側が沢地となり一部調査不能箇所がある。現況は水田及び沢で、遺構は西側の水田部分のみでの検出で、溝跡7条・土坑7基・ピット・倒木痕跡がある。

1~4トレンチは当遺跡中央部に位置し、周辺に比べ標高値が高く現況は畠地である。遺構として溝跡2条・土坑4基・掘立柱建物跡4棟・ピットがある。1・2トレンチ検出の土坑は平面形が長方形を呈し底面中央にピットを有する、いわゆる「陥し穴」とされる土坑である。

E区・12・13トレンチ及び5~11トレンチは遺跡北側に位置し、条里型土地割が他の地点に比べて良好な状態で看取される地点である。土壤は全体的に砂質であるが東側に向かうにつれて粘性が強くなり土色も黒褐色系となる。13トレンチでは南北に延びる畦畔及び段を各1条確認し、5トレンチでは土坑を2基検出している。他に杭・倒木痕跡がある。

F区・14~18トレンチでは溝跡（堀）を中心とした遺構が検出されている。ほぼ西辺部が確認され、長さは98m程を計る。堆積土中より多量の陶磁器類、木製品等が出土している。他に土坑5基・溝跡2条が確認されている。なお、1層直下で焼夷弾を4本検出している。

G区ではピット及び倒木痕跡のみの検出にとどまっている。

B区では北端部分で大畦の精査を行っているが、後世の削平・盛土が著しく畦畔等の遺構の検出は出来なかった。基本層を5層確認したが3層までが水田作土と考えられた。なお、4層とした黒色系の土壤は南側に向かうにつれて層厚を増し、層中には縄文土器・石器が含まれる。遺構として調査区中央部から南端部にかけて畦畔5条・溝跡2条・土坑3基・倒木痕跡が確認されている。畦畔は3層面での確認で層中に灰白色火山灰がブロックで含まれている。また、作土面で火山灰を埋土とする牛と考えられる足跡を検出している。

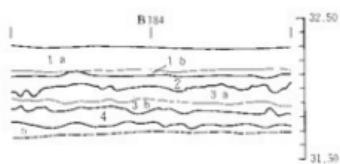
C区は基本層位がB区とほぼ同様であるが、北側部は全体的にやや砂質土壤となる。遺構として畦畔12条・溝跡2条を確認し、北端部の4層面では径1m程の石組垣を2基検出している。

D区は調査区西南部に位置するが全体的に砂質土壤で、特に西側部では3層上下部において砂疊層の堆積が各所にみられ河川等の氾濫が推察された。遺構として畦畔5条・溝跡6条・土坑3基がある。

4. 発見遺構と出土遺物

1) 基本的層位

調査区が広範囲にわたるため層序等若干の違いはみられるが、水田地域は大別して5枚の層位を確認している。1層はa~dに細別されるが1a層が現代の作土となる。2層は広範囲に確認されるもので、色調は黒褐色系を呈する粘性の強いものである。



1 a 層	褐灰色	10Y R 5/6	粘土質シルト	現代作土
1 b 層	黒褐色	10Y R 5/6	粘土質シルト	
2 層	黒褐色	10Y R 5/6	粘	3層をまき上げている
3 a 層	にぼい 黄褐色	10Y R 5/6	粘	土 やや砂質
3 b 層	黒褐色	10Y R 5/6	粘	土
4 層	黒褐色	10Y R 5/6	砂質粘土	
5 層	黒褐色	10Y R 5/6	砂質シルト	

第4図 B区183~185地点断面

出土遺物が少なく時期決定が難しいが、近世頃が下限と考えられる。3層はa・b・cに細別したが、黄褐色系の砂質粘土で下層につれて色調が若干暗くなる。3a・3b層中にはブロック状に灰白色火山灰が含まれている。畦畔・溝跡等の遺構の多くはこの3層面が確認面となっている。4層は黒褐色を呈する砂質の粘土及びシルト層で、調査区南部につれて層厚を増している。少量ではあるが縄文土器・石器を包含している。5層が段丘堆積物上部となる層で褐色・橙色系の粘土及び砂である。下部になるにつれて砂礫となり地表下約1mで疊層となる。

2) 遺構・遺物の概要

発見遺構には掘立柱建物跡・溝跡・土坑・水田跡・炉跡等が、出土遺物には縄文土器・石器・土師器・須恵器・陶器・磁器・木製品・金属製品等、各時期にわたるもののが確認されている。ここでは検出遺構を中心に概略のみの記述にとどめる。

掘立柱建物跡＝4トレンチのみでの確認である。柱穴群がトレンチ東南部に集中しており、柱筋等から計4棟の建物跡を推定した。出土遺物はない。

S B 2建物跡は桁行3間・梁行2間の東西棟のものである。柱穴は円形を基調とするが桁南側の柱穴はやや長円形を呈し規模が大きい。柱痕跡は径15cm程の円形で、深さは遺存状態の良好なもので40cmを計る。柱間寸法は桁南側で西から152+100+148cmで総長400cm、梁西側で北から145+195cmで総長340cmを計る。S D 8溝跡、S B 3・4建物跡に切られている。

S B 3建物跡は1間×1間の方形のものである。すべての柱穴底面に平板状の石が礎板として据えられている。柱穴は円形を基調とするが大小の違いがみられる。柱痕跡は径12~16cmの円形である。柱間寸法は東西列で186・190cm、南北列で204・205cmを計る。

溝跡＝各調査区で計22条確認している。調査区域の制約から性格等不明のものが多い。

S D 9溝跡はF区を中心に確認され、状況から堀跡と考えられた。確認面は基本層2層面となる。規模等把握のため計5本のトレンチを設定したが、14・16トレンチで北辺を、17トレンチでS D 13溝跡としたが南辺を確認している。南西端コーナー部が未確認ではあるが西辺長は約98mを計る。堀の幅は2m前後であるが南側に向かうにつれて幅広となり、西南部では3.5mを計る。17トレンチでは堀幅が5mにわたり80cm程に狭くなる箇所があり、入り口の性格をもつものと考えられた。堆積土は大別して4層確認し、2層・3層中からは木の葉や枝・木製品・陶磁器類が多量に出土している。堀の内外には切り株が遺存し、遺物の出土状況、一部整地した土層も確認され、堀は遺物が廃棄された時期に埋めもどされ廃絶したものと判断された。陶磁器は江戸時代後期から明治時代前半頃のものと考えられる。

*仙台市博物館所蔵の「名取郡北方山田邑」の絵図（文政5年・1822年）に「ヤチヤシキ」と「観世音」と描かれた地点がある。検討の結果、S D 9溝跡がこのヤチヤシキ西辺の堀に比定され、遺構との関連は不明であるが4トレンチが観世音の地点と推定される。

S D 11溝跡はB区175地点、3a層上面で確認している。確認長は約4.8mで直線的に延び、幅は約1m、深さ40cmを計る。断面形は逆台形を呈し、堆積土は細別で5層確認し、レンズ状堆積である。出土遺物はない。溝跡の方向は真北に対し東へ約12度偏している。性格は水路と考えられる。同様の溝跡はB区183地点で1条、さらに昨年度の調査でも20条程確認しているが、畦畔等との関係については今のところ判然としない。

土坑=計25基確認している。形態として円形と方形を基調とする二種類が認められる。出土遺物が少なく、所属時期が判然としないものが多い。

S K 15土坑はF区X280地点、S D 9溝跡西側に位置する。確認面は5層地山面である。平面形はやや丸い円形をする。一辺1.7mを計り、断面形は底面が平坦な皿形である。深さは30cmで堆積土は1層確認し、底面より糞穀が集中して出土している。

S K 9土坑は1トレンチ北側に位置する。確認面は5層面である。平面形は135×75cm程の隅丸方形を呈し、壁は35cm程で垂直に立つ。底面には径20cm・深さ25cmのピットが1個みられる。堆積土は細別して4層確認した。遺物は無い。「陥穴」と考えられるもので、近接した地点に他に2基(S K 8・10)ある。

水田跡=B・C・D・E区・12トレンチで確認(計18条の畦畔)している。確認面は2層及び3層で、多くは3層面である。調査区の制約から区画等の判明するものは無い。3層中には灰白色火山灰・ロクロ使用の土師器片が出土しており時期は平安時代と考えられるが、疑似畦畔の可能性のものもあり、今後の整理課題である。

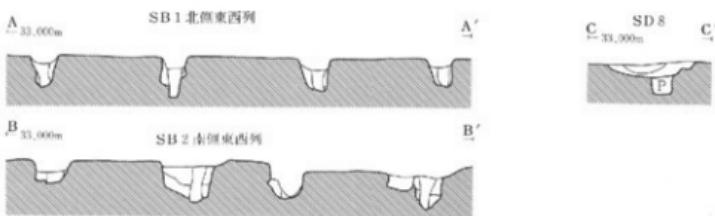
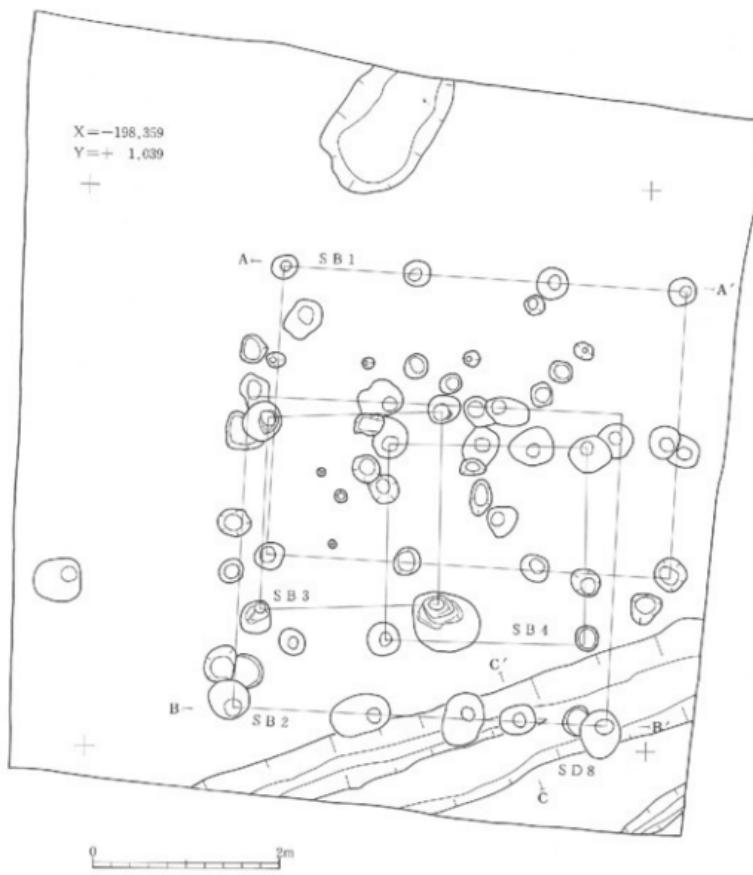
B区110~170地点では3層面で5条(東西方向に延びるもの2条・南北方向3条)の畦畔を確認している。方形の区画を有すると考えられるが詳細は不明である。土盛り畦畔で規模は上端幅で50~60cm、下端幅が100cm前後を計る。畦畔方向は畦畔2が真北に対し24度程東偏するが他はほぼ真北を向き、畦畔1は真北に対しほぼ直交している。田面は緩やかに南東方向へ傾斜し50mで15cm程の比高差がある。150地点の作土面では牛の足跡が9個確認されている。

炉跡=C区北端部、C-77・80地点で計2基確認している。確認面は基本層4層である。径60~80cmの円形で皿状を呈する掘り方に、20cm大の礫(河原石)を円形に配し、底面にまで石を敷き詰めた石組炉である。2基とも焼け面が顕著にみられず、若干礫の一部がうすく赤変している程度である。出土遺物はないが確認面が4層であり、時期は縄文時代と考えられる。

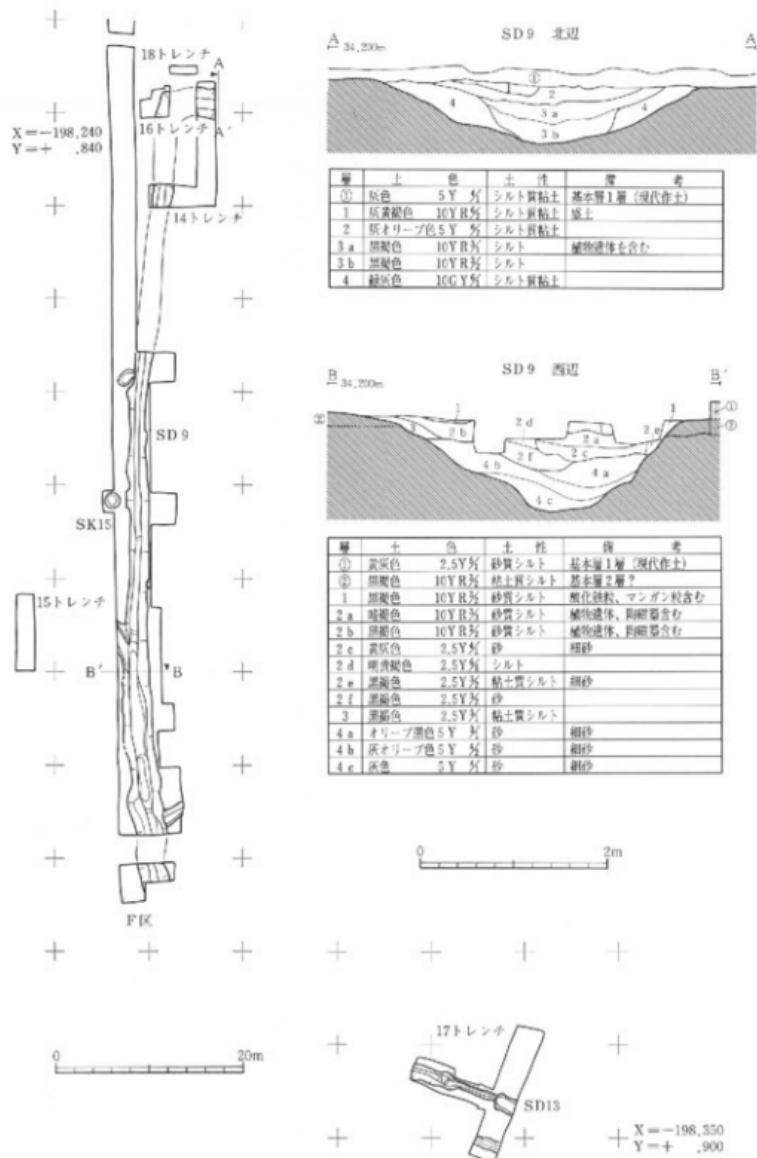
5.まとめ

二年度にわたる調査で縄文時代から近世までの遺構・遺物が数多く検出されたが、生産遺構を中心となる遺跡であることが再確認された。平安時代の水田跡の検出は、部分的な確認であり詳細な検討が必要となるが、条里遺構を考えていくうえでの資料となり得る。調査は来年度が最終となり、資料の増加が期待される。

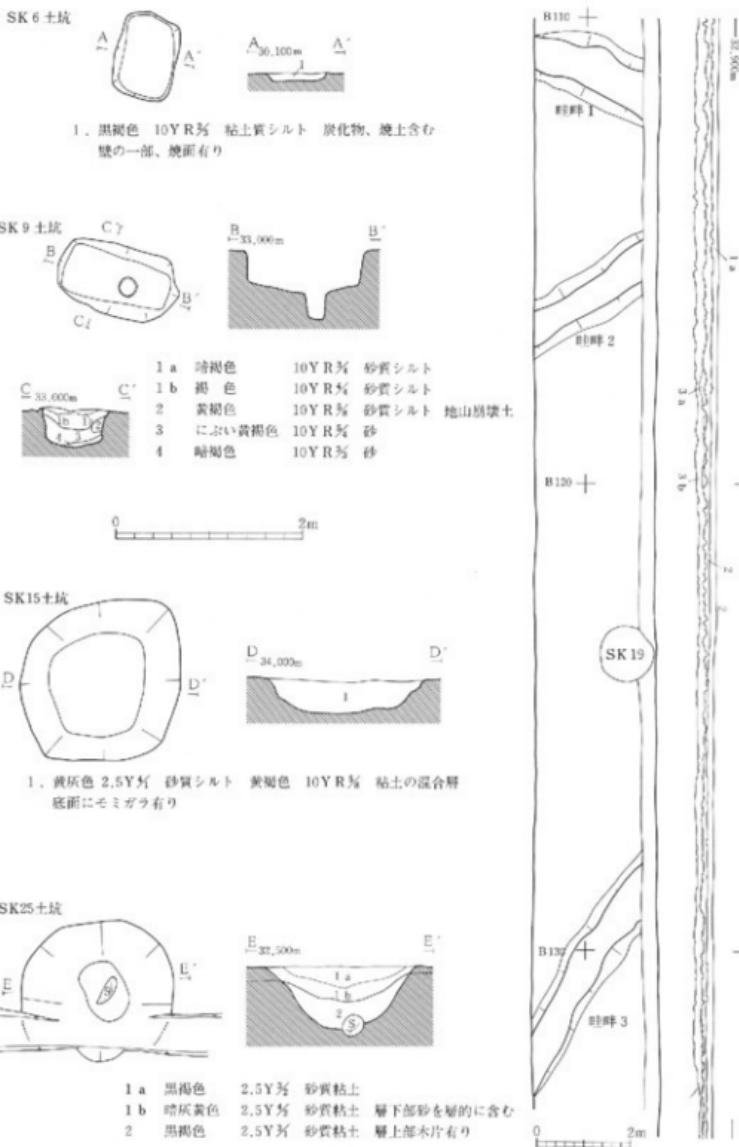
(渡部弘美、高倉祐一)



第5図 SB 1・2・3・4 建物跡



第6図 SD 9・13溝跡



第7図 SK 6・9・15・25土坑・B区水田跡(畦畔1~3)

写真 1

遺跡周辺航空写真
(1987年)



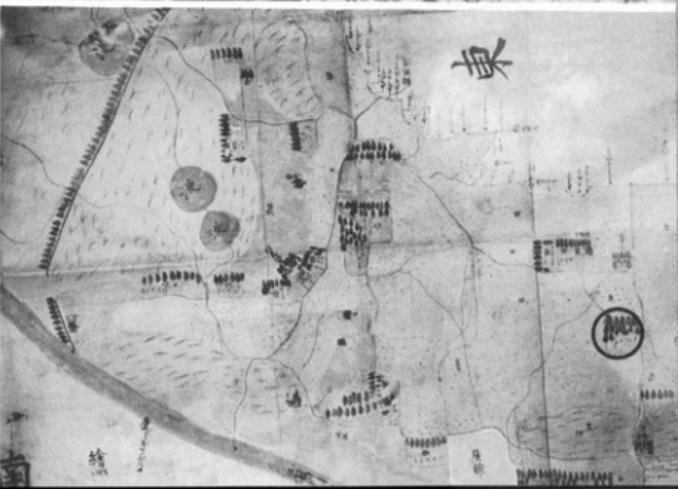
写真 2

遺跡周辺航空写真
(1956年)



写真 3

「名取郡北方山田邑」
絵図
(文政 5 年・1822年)
仙台市博物館所蔵



○印 同地点



写真4
掘立柱建物跡全景
(北より)
4トレンチ



写真5
SD 9溝跡全景
(南より)



写真6
SD 9溝跡断面
(北より)

写真7

S D 13溝跡全景
(西より)
17トレンチ



写真8

S D 8土坑全景
(北より)



写真9

S K 20土坑全景
(北東より)

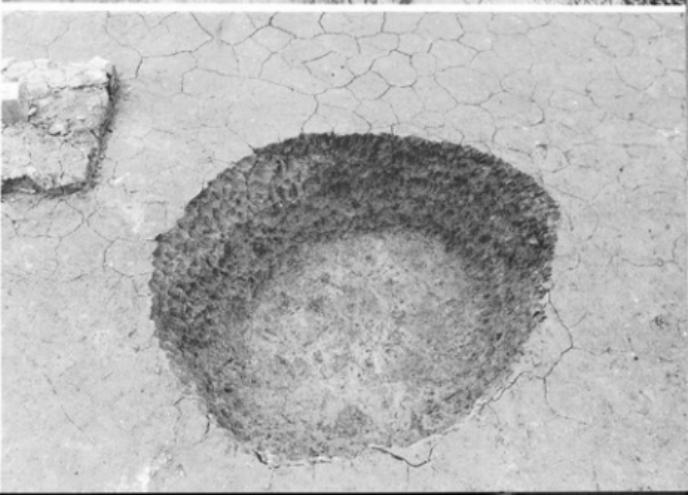




写真10
3層検出水田跡
(北西より)
B区1～5号畦畔



写真11
3層検出水田跡牛足跡
(南より)
B区150地点



写真12
2号石組炉全景
(東より)
C区77地点

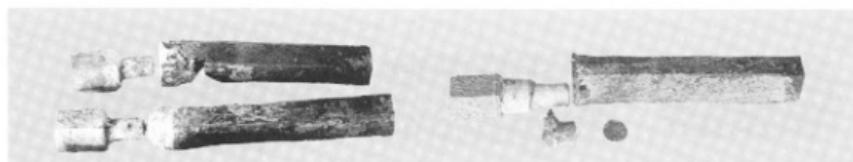


写真13 F区出土焼夷弾



写真14 S D 9溝跡出土遺物 1

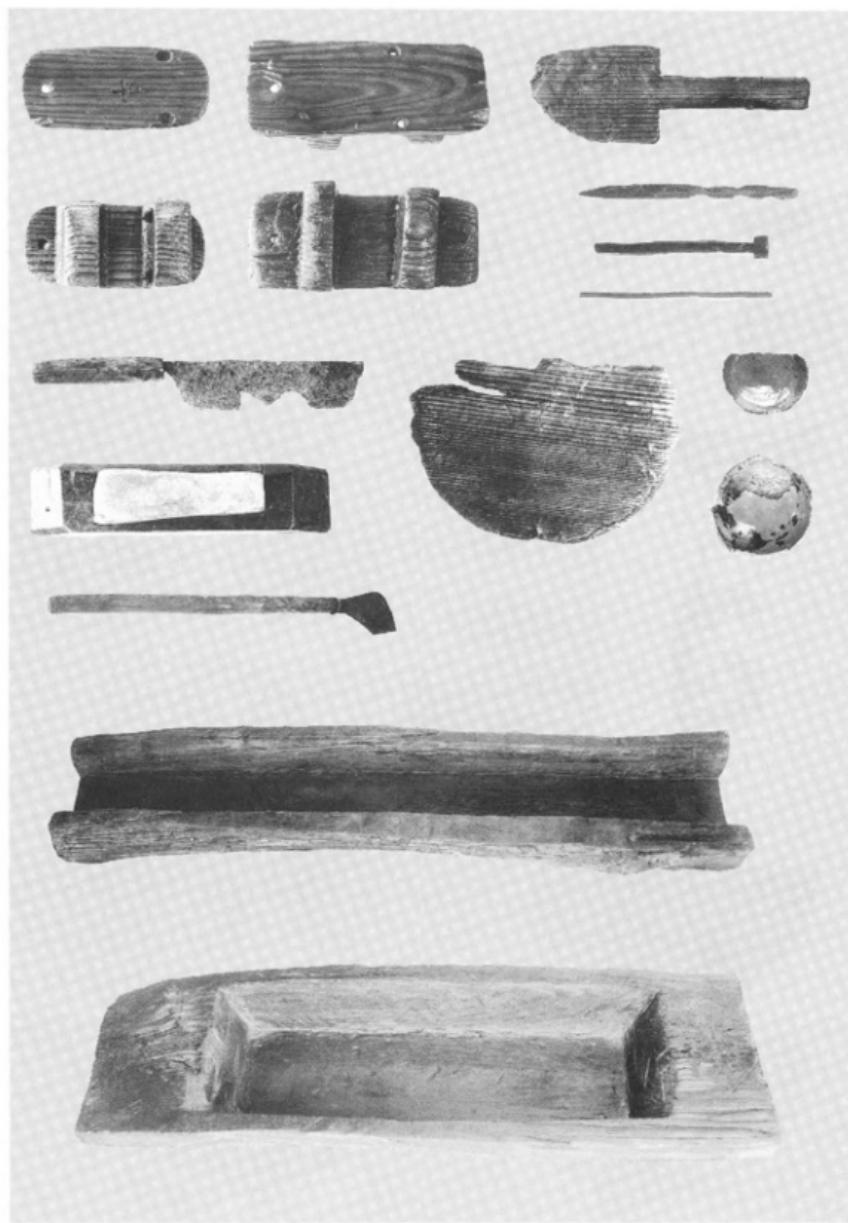


写真15 SD 9溝跡出土遺物 2

[2] 郡山遺跡

1. 遺跡の位置と環境

郡山遺跡は、仙台市東南部の郡山低地に所在する。遺跡は低地東半部でも北寄りの位置にあり、東西800m、南北900m、面積72万m²を有している。遺跡北端部は低地東半分でも最も標高の高い場所であり(標高12~11m)、南方へは徐々に標高を減じていく、名取川沿いでやや標高が高くなる傾向にあるが、北方とは段丘崖により標高差が認められる。この段丘崖は郡山遺跡及び隣接する西台畠遺跡、北目城跡の北縁と関連するとともに、郡山遺跡II期官衙外郭北辺の設定など、官衙跡との関連性も考えられる。また旧河道には現況でも河道を確認できるものもあるが、遺跡範囲内では、これまでの旧河道部分の調査でも、I期官衙以前、I期官衙、II期官衙の時期の遺構が検出されており、当時は微起伏はあるものの北高南低の平坦な地面を呈していたものと思われる。遺跡の南縁については、比高差1~2mの二つの旧河道が考えられている。

2. 調査概要

郡山遺跡の発掘調査の詳細については、仙台市文化財調査報告書第146集「郡山遺跡 XI—平成2年度発掘調査概報」に記述し、本報告書では概要にとどめる。

(1) 第87次発掘調査：調査区は、方四町II期官衙の中央北寄りの地区で、外郭北辺より南約150mの位置にあり、第24次調査区の東に隣接する。

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1軒、溝跡2条、土坑3基、柱穴・ピット16基である。第24次調査との関連では、S B264、S K258、259、1412の全容と、S D224、226がさらに東方へのびることが判明した。なかでも、S B264は、その建物方向及び第24次調査で検出されていたS B236(東西棟総柱建物跡)と同規模で、東西に軒を連ねる配置関係にあることが明らかとなっている。また、今回新たに発見された遺構のうちで、S I 1299竪穴住居跡については、出土遺物からI期官衙以前に位置付けられる可能性がある。

(2) 第88次発掘調査：調査区は、方四町II期官衙の中央北東寄りの地区で、外郭北辺より南約120mの位置にあり、第87次調査区の北東に近接している。

今回の調査で発見された遺構は、材木列1条、土坑5基、柱穴・ピット20基である。材木列S A1289は、N-34°-Eの方向を示すが、その延長上に位置する第87次調査区では検出されていない。

(斎野裕彦)



第8図 郡山遺跡調査区位置図

文化財課職員録

課長	早坂春一	調査第一係			
管理係	調査第一係				
係長	鶴田義幸	係長	佐藤 隆	教諭	佐藤好一
主事	白幡靖子	主任	田中則和	主事	佐藤 洋
〃	佐藤良文	教諭	太田昭夫	〃	金森安孝
〃	高橋三也	主任	篠原信彦	教諭	小川淳一
〃	庄司 厚	〃	木村浩二	主事	渡部弘美
		主事	古岡恭平	〃	工藤哲司
		〃	斎野裕彦	〃	主浜光朗
		教諭	五十嵐康洋	〃	長島榮一
		〃	渡辺雄二	〃	工藤信一郎
		主事	大江美智代	〃	荒井 格
				〃	中富 洋
		調査第二係			
係長	加藤正範	教諭	高倉祐一		
主任	熊谷幹男	主事	佐藤 淳		
		〃	渡部 紀		

「仙台平野の遺跡群」発掘調査報告書刊行目録

- 第37集 仙台平野の遺跡群I—昭和56年度発掘調査報告書—(昭和57年3月)
第47集 仙台平野の遺跡群II—昭和57年度発掘調査報告書—(昭和58年3月)
第65集 仙台平野の遺跡群III—昭和58年度発掘調査報告書—(昭和59年3月)
第75集 仙台平野の遺跡群IV—昭和59年度発掘調査報告書—(昭和60年3月)
第87集 仙台平野の遺跡群V—昭和60年度発掘調査報告書—(昭和61年3月)
第97集 仙台平野の遺跡群VI—昭和61年度発掘調査報告書—(昭和62年3月)
第111集 仙台平野の遺跡群VII—昭和62年度発掘調査報告書—(昭和63年3月)
第125集 仙台平野の遺跡群VIII—昭和63年度発掘調査報告書—(平成元年3月)
第133集 仙台平野の遺跡群IX—平成元年度発掘調査報告書—(平成2年3月)
第147集 仙台平野の遺跡群X—平成2年度発掘調査報告書—(平成3年3月)

仙台市文化財調査報告書第17集

仙台平野の遺跡群X

平成3年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市青葉区国分町3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷 横 東 北 プ リ ン ト
仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166
